

*David Copperfield*にみられる英語表現の特質についてCharacteristics of English Usage in *David Copperfield*吉田 恒義  
Tsuneyoshi YOSHIDA

## (1)

ディケンズ (Dickens) の自伝的作品『デイヴィッド・コパーフィールド』 (*David Copperfield*) においては、主人公デイヴィッドの幼年時代、少年時代の描写が印象深く、ディケンズらしさがよく現れていると言える。特に最初の数章までの幼少年期のデイヴィッドの目を通した描写の部分は、読者に強烈な印象を与える場合が多い。本稿ではディケンズの特徴がよく現れていると思われる個所を取り上げ、ディケンズの英語表現の特質を考察してみたい。

ディケンズに特有と言ってもよい描写の箇所が多く見られる "I Observe" と題した第2章を中心に、ディケンズの英語表現に検討を加えてみたい。先ずクレアラ・ペゴティ (Clara Peggotty) の描写の部分を見てみよう。ペゴティはデイヴィッドの乳母で、デイヴィッドに対して常に深い愛情を注いでくれる女性である。

...Peggotty, with no shape at all, and eyes so dark that they seemed to darken their whole neighbourhood in her face, and cheeks and arms so hard and red that I wondered the birds didn't peck her in preference to apples. (II, 13) <sup>1)</sup>

幼いデイヴィッドの目を通して描かれたペゴティの姿は、大人の目に映るペゴティの姿と異なっている。デイヴィッドはペゴティの体の輪郭、特に彼女の顔の輪郭を意識していないことは、"with no shape at all" という表現からも明白である。彼女の目については、大きいとか小さいという認識の仕方ではなく、「黒い」「dark」という認識の仕方である。"eyes so dark that they seemed to darken their whole neighbourhood in her face" という表現からは、ペゴティの瞳が真っ黒で大変目立つこと、そのために顔の他の部分まで真っ黒の瞳の影響を受けて黒ずんで見えることが理解できる。更に彼女の目がアニミスティックに表現されていることにも注意しておきたい。"they seemed to darken their whole neighbourhood" という表現は、まるで目が独立した意思を持っているかのようで読者に新鮮な感じを与える。

ペゴティの頬と腕は大変血色がよいためにデイヴィッドは次のような感情を持つ。"I wondered the birds didn't peck her in preference to apples." 「小鳥がなぜリンゴより先に、彼女を突つかないのだろうか」と私は不思議に思った」と幼いデイヴィッドが真面目に考えているところがユーモラスな点と言える。ペゴティは「真っ黒な瞳」と「かたくて赤い頬と腕」そのものであり、デイヴィッドにとってはペゴティの外面的な形は大して重大なことではないかのように、厳然として本質的に存在しているのである。

次はペゴティの指に関する描写である。

I have an impression on my mind which I cannot distinguish from actual remembrance, of the touch of Peggotty's forefinger as she used to hold it out to me, and of its being roughened

by needlework, like a pocket nutmeg-grater. (II, 13)

ペゴティの人差し指の感触が「ざらざらしていた」“roughened”というデイヴィッドの印象はごく普通のものであるが、「まるで携帯用ナツメッグおろし金のように」“like a pocket nutmeg-grater”ざらざらしていたという比喩表現はシミリー (simile) で大変奇抜である。ナツメッグは19世紀の英国において「夜の温かくした飲物に入れる」<sup>2)</sup>ものとして一般家庭で使用されており、ナツメッグをすりつぶすおろし金は広く各家庭に普及していた。ペゴティの人差し指のざらざらした感じを、幼いデイヴィッドは身近なナツメッグおろし金の表面のざらざらした感じにたとえる比喩表現シミリーによって、ペゴティの指の感触を印象的なものになっている。

次の引用はデイヴィッドが針仕事をしているペゴティと会話をしている時、ペゴティが突然針仕事の手を止めて、デイヴィッドに対する愛情表現として彼を抱きしめる場面である。

...she [Peggotty] laid aside her work (which was a stocking of her own), and opening her arms wide, took my curly head within them, and gave it a good squeeze. I know it was a good squeeze, because, being very plump, whenever she made any little exertion after she was dressed, some of the buttons on the back of her gown flew off. And I recollect two bursting to the opposite side of the parlour, while she was hugging me. (II, 17)

ペゴティの体は「大変肥っているの」“being very plump”、彼女が少しでも力をいれてデイヴィッドを抱きしめるといつも「上着の背のボタンがいくつがちぎれて飛ぶのだった」“some of the buttons on the back of her gown flew off”という表現からは、健康的でエネルギーに満ち溢れたペゴティのイメージが浮かび上がってくる。今回もペゴティがデイヴィッドを抱きしめた拍子に、「ボタンが二つ、部屋の向こう側へパツとはねて飛んだ」“two bursting to the opposite side of the parlour”ことをデイヴィッドは憶えているのである。ボタンが飛ぶという表現は、ペゴティのエネルギッシュな姿を彼女のイメージとして鮮明に生み出す効果を持つ。このように幼いデイヴィッドの目に映ったペゴティは、健全で人情味があり、気はつらつとした女性である。ペゴティは生命の息吹を感じさせてくれるほど生き生きとしている。

## (2)

次の引用箇所は幼いデイヴィッドが、母と再婚を予定しているエドワード・マードストーンのことを知ってまだ間もない頃のこと、彼に対する印象を説明しているところである。

Mr. Murdstone and I were soon off, and trotting along on the green turf by the side of the road. He held me quite easily with one arm, and I don't think I was restless usually; but I could not make up my mind to sit in front of him without turning my head sometimes, and looking up in his face. He had that kind of shallow black eye—I want a better word to express an eye that has no depth in it to be looked into—which, when it is abstracted, seems, from some peculiarity of light, to be disfigured, for a moment at a time, by a cast. Several times when I glanced at him, I observed that appearance with a sort of awe, and wondered what he was thinking about so closely. His hair and whiskers were blacker and thicker, looked at so near, than even I had given them credit for being. A squareness

David Copperfieldにみられる英語表現の特質について

about the lower part of his face, and the dotted indication of the strong black beard he shaved close every day, reminded me of the waxwork that had travelled into our neighbourhood some half-a-year before. This, his regular eyebrows, and the rich white, and black, and brown, of his complexion—confound his complexion, and his memory!—made me think him, in spite of my misgivings, a very handsome man. I have no doubt that my poor dear mother thought him so too. (II, 22)

マードストーンがデイヴィッドの母親と再婚する前までは、マードストーンはデイヴィッドに対してまだ残酷で厳しい態度は見せていない。マードストーンの本性がよくわからないデイヴィッドであったが、彼はマードストーンが乗ってきた馬に乗せてもらいたい気持ちに駆られ、希望どおりデイヴィッドは馬に乗せてもらう。マードストーンの前にすわらされているデイヴィッドは後ろのマードストーンのことを気がかりで、時々後ろを振り返ってはマードストーンの顔を見上げるのであった。デイヴィッドはマードストーンの目を見て、「ひどく薄っぺらな黒い目」“that kind of shallow black eye”であると感ずる。すぐ近くから見るとマードストーンの「髪や頬髯ははるかに黒く、濃い」“His hair and whiskers were blacker and thicker”ということがデイヴィッドにはわかる。デイヴィッドは更に顎鬚のことについて、「毎日きれいに顔をあたるせいか、黒く硬い顎鬚の剃り跡が、プツプツと目だって見える点」“the dotted indication of the strong black beard he shaved close every day”に着目しながら説明しており、観察力の鋭さを示している。マードストーンの顔の下半分がひどく「角ばっていること」“squareness”にも気づく。デイヴィッドの目に映ったマードストーンは「黒い目」、「黒々とした髪と濃い頬髯」、「硬い顎鬚の剃り跡」、「角ばった顔」をしており、これらの表現の総体がマードストーンを非常に男性的な特徴を持った人物に仕立て上げているということが言える。

やがてこのエドワード・マードストーンはデイヴィッドの母親と再婚する。するとすぐにこれまでの家庭環境が一変してしまったようにデイヴィッドには思える。

As soon as I could creep away, I crept up—stairs. My old dear bedroom was changed, and I was to lie a long way off. I rambled down—stairs to find anything that was like itself, so altered it all seemed; and roamed into the yard. I very soon started back from there, for the empty dog—kennel was filled up with a great dog—deep-mouthed and black-haired like Him—and he was very angry at the sight of me, and sprang out to get at me. (III, 43)

新しい父親ができたと聞いたデイヴィッドが庭へ出てみると今まで空だった犬小屋に大きな犬がいる。この犬はエドワード・マードストーンと同じように、「声が低く、黒い毛」“deep-mouthed and black-haired”の犬であったという表現に注目してみたい。「低い声」と「黒い毛」は目の前の犬とマードストーンの両方の描写に共通して使用されている表現である。それ故に、デイヴィッドには目の前の恐ろしい黒い毛の犬が、自分の存在をも脅かしかねないマードストーンのイメージと重なって見えたことであろう。マードストーンは犬小屋の中の犬のように、もっとも醜いもの、最も恐ろしいものをまざまざとデイヴィッドに見せ付けたことになる。

幼いデイヴィッドにとって新しい父親マードストーンは自分の領域を踏みにじる悪魔的、破壊的な人物であるように映る。生まれたときから父親のいないデイヴィッドにとっては、マードストーンは自分の目の前に現れた最初の成人男性であった。デイヴィッドはすぐに自分と母親との間に割り込んできたマードストーンに反発する。次は父親になりたてのマードストーンが反抗的な気持ちを持った

デイヴィッドを威圧しているところである。

‘David,’ he said, making his lips thin, by pressing them together, ‘if I have an obstinate horse or dog to deal with, what do you think I do?’

‘I don’t know.’

‘I beat him.’ (IV, 46)

デイヴィッドの反抗的な態度はマードストーンによって直感的に見破られている。デイヴィッドはマードストーンによって「言うことを聞かない馬や犬」“an obstinate horse or dog”のイメージで捉えられている。反抗的な「馬や犬は殴る」“I beat him.”とマードストーンがデイヴィッドに語っているようにマードストーンは暴力的で恐ろしい存在である。「殴る」“beat”という表現から、マードストーンは暴力で相手を服従させてしまうタイプの人物であることが理解できる。

エドワード・マードストーン（ミスター・マードストーン）には姉で独身のジェイン・マードストーン（ミス・マードストーン）がいる。ミス・マードストーンは弟の結婚を機に、弟夫婦の家事の手伝いという名目でデイヴィッドたちと一緒に暮らすことになる。ミス・マードストーンは次のように描写されている。

It was Miss Murdstone who was arrived, and a gloomy-looking lady she was; dark, like her brother, whom she greatly resembled in face and voice; and with very heavy eyebrows, nearly meeting over her large nose, as if, being disabled by the wrongs of her sex from wearing whiskers, she had carried them to that account. She brought with her two uncompromising hard black boxes, with her initials on the lids in hard brass nails. When she paid the coachman she took her money out of a hard steel purse, and she kept the purse in a very jail of a bag which hung upon her arm by a heavy chain, and shut up like a bite. I had never, at that time, seen such a metallic lady altogether as Miss Murdstone was. (IV, 47-48)

ミス・マードストーンは見るからに「陰気くさい感じの女性」“a gloomy-looking lady”である。彼女の顔の色は、弟のエドワードと同様に“dark”である。眉毛の様子については「恐ろしく眉毛が濃く、しかもそれが、大きな鼻の上で、ほとんどつながらんばかりになっていた」“with very heavy eyebrows, nearly meeting over her large nose”と描写されている。眉毛があたかも独立した意志を持っているかのようにアニミスティックに表現されており、濃い眉毛を印象的なものになっている。ミス・マードストーンは女性であるために頬髯をたくわえることが出来なかったので、頬髯の埋め合わせがこの眉毛になったといった女性であった。このことから、ミス・マードストーンは大変男性的な女性で、女性が持つ優しさが少しも感じられず、幼いデイヴィッドには近づきたくない怖い人物と映ったことは容易に理解できよう。

次にミス・マードストーンの所持品に目を転じてみよう。デイヴィッドは彼女の「二つのおそろしく頑丈そうな黒い箱」“two uncompromising hard black boxes”に注目する。箱が持つ頑丈そうな黒いイメージは、そのまま持ち主のミス・マードストーンにも当てはまるものと言える。箱のふたには「堅い真鍮の釘」“hard brass nails”で彼女の名前の頭文字が入れている。また、彼女の財布は「堅い鋼鉄の金入れ」“a hard steel purse”で、この鋼鉄で出来た財布が「重い鎖」“a heavy chain”のついた手提げ袋の中に入っている。手提げ袋は「まるで牢獄」“a very jail”そっくりで、しまる

David Copperfieldにみられる英語表現の特質について

ときの様子は「ガチッと噛み付くような音を立ててしまる」“shut up like a bite”と比喻表現シミリーが使用されており、犬のイメージが浮かび上がってくる。さらに“a very jail of a bag”と“a heavy chain”という二つの語句から、「牢獄」のイメージが浮かんできて、牢獄の持つ束縛するとか、自由を奪うといった性格が、そのままミス・マードストーンの性格と重なり合う効果を生み出していると言えよう。

デイヴィッドの目にはミス・マードストーンの姿は「全身金ものづくりの女」“a metallic lady altogether”であるかのように見える。“metallic”という単語から、「心の冷たい」、「感情のない」、「融通性のない」といったイメージが浮かび上がり、本質的に冷淡な性格の持ち主であるミス・マードストーンについてデイヴィッドが抱くイメージと重なる。<sup>3)</sup>

次はデイヴィッドの家の居間に通されたミス・マードストーンに対して、デイヴィッドとデイヴィッドの母が紹介される場面である。

She [Miss Murdstone] was brought into the parlour with many tokens of welcome, and there formally recognized my mother as a new and near relation. Then she looked at me, and said:

‘Is that your boy, sister-in-law?’

My mother acknowledged me.

‘Generally speaking,’ said Miss Murdstone, ‘I don’t like boys. How d’ye do, boy?’

Under these encouraging circumstances, I replied that I was very well, and that I hoped she was the same; with such an indifferent grace, that Miss Murdstone disposed of me in two words:

‘Wants manner!’

Having uttered which with great distinctness, she begged the favour of being shown to her room, which became to me from that time forth a place of awe and dread, wherein the two black boxes were never seen open or known to be left unlocked, and where (for I peeped in once or twice when she was out) numerous little steel fetters and rivets, with which Miss Murdstone embellished herself when she was dressed, generally hung upon the looking-glass in formidable array. (IV, 48)

ミス・マードストーンの「わたし、男の子は好きじゃないんですけどね」“I don’t like boys.”とか、「ずいぶんお行儀知らずなのねえ」“Wants manner!”という突然のセリフは、理不尽な内容の表現であって幼いデイヴィッドを震え上がらせるには十分であった。そして彼女が使用することになった部屋はデイヴィッドにとってはこれまでとは違って、「怖い地獄のような場所」“a place of awe and dread”になってしまうのである。部屋の中の姿見の上には、ミス・マードストーンの装飾用の「鋼のかせや留め鉄」“steel fetters and rivets”が沢山ぶら下がっていたと表現されており、“a metallic lady”としてのミス・マードストーンのイメージを生み出すのに効果的であると言える。

幼いデイヴィッドの目に映ったミスター・マードストーンとミス・マードストーンを見てきたが、デイヴィッドにとってはマードストーン姉弟はどちらも大変怖い存在である。

I could have done very well if I had been without the Murdstones; but the influence of the Murdstones upon me was like the fascination of two snakes on a wretched young bird. (IV, 55)

ここではデイヴィッドは「哀れなひな鳥」“a wretched young bird”にたとえられ、マードストーン姉弟はそのひな鳥を狙う「二匹の蛇」“two snakes”にたとえられている。ここにみられる比喩表現は、ひな鳥同然のデイヴィッドがマードストーン姉弟をまるで蛇であるかのように怖がっている姿を的確に言い表しており、比喩表現の効果は大きいと言える。

次はマードストーン姉弟が拠り所としている信念について描写されている個所である。

Firmness, I may observe, was the grand quality on which both Mr. and Miss Murdstone took their stand. However I might have expressed my comprehension of it at that time, if I had been called upon, I nevertheless did clearly comprehend in my own way, that it was another name for tyranny; and for a certain gloomy, arrogant, devil's humour, that was in them both. The creed, as I should state it now, was this. Mr. Murdstone was firm; nobody in his world was to be so firm as Mr. Murdstone; nobody else in his world was to be firm at all, for everybody was to be bent to his firmness. Miss Murdstone was an exception. She might be firm, but only by relationship; and in an inferior and tributary degree. My mother was another exception. She might be firm, and must be; but only in bearing their firmness, and firmly believing there was no other firmness upon earth. (IV, 49)

マードストーン姉弟の信念は「堅固」“firmness”であった。ミスター・マードストーンとミス・マードストーンの状態について、“firmness”と“firm”の繰り返し表現によって、何ものにも屈することのない妥協を許さぬ力強い二人の態度が生き生きと伝わってくる。“firmness”という語は本来は「しっかりした態度、考え」、「力強さ」といったように、よい意味で使用されるものである。しかし幼いデイヴィッドは、マードストーン姉弟の信奉する“firmness”は、本来の意味から大きく逸脱した「おそろしく陰険で、傲慢な、悪魔的根性」“a certain gloomy, arrogant, devil's humour”の別名であると直観的に理解している。従って、デイヴィッドの目に映るマードストーン姉弟は、“firmness”、“firm”の繰り返しによって、恐い悪魔的根性を持った姉弟として鮮明に描写されていると言える。

### (3)

これまでペゴティとマードストーン姉弟の人物描写の表現を中心に見てきた。幼いデイヴィッドの目を通して描かれたこれらの人物は、読者に大変強い残像を与える個性豊かな者たちばかりであると言える。アニミスティックに表現されたペゴティの目、大変奇抜な比喩シミリーで表現された彼女の人差し指の感触、「ボタンが飛ぶ」という表現によって生み出された健康的でエネルギーに満ち溢れた彼女のイメージ等が、ペゴティを個性豊かな人物に創り上げている。

獰猛な犬のイメージで表現されたミスター・マードストーンの悪魔的、破壊的な姿、アニミスティックに表現されたミス・マードストーンの手提げ袋、金属のイメージで表現されたミス・マードストーンの性格、“firmness”、“firm”という語の繰り返しによって表現されたマードストーン姉弟の陰険で傲慢な悪魔的根性等が、マードストーン姉弟の恐い人物像を創り上げている。ペゴティ及びマードストーン姉弟の個性豊かな人物像は以上のような様々な英語表現によって鮮明に描写されていると言える。

これらのディケンズの英語表現を生み出す原動力は次の引用文の中に求めることが出来る。

David Copperfieldにみられる英語表現の特質について

...if it should appear from anything I may set down in this narrative that I was a child of close observation, or that as a man I have a strong memory of my childhood, I undoubtedly lay claim to both of these characteristics. (II, 13)

「細かい観察」「close observation」と「記憶力のよさ」「a strong memory」がここで注意すべき二点で、ディケンズ自身がこの二点を持ち合わせていた作家と言える。ディケンズの細かい観察力と記憶力のよさで、ペゴティやマードストーン姉弟といった個性豊かな人物たちが効果的な英語表現によって描写されているのである。

## 註

- 1) テキストはCharles Dickens, *David Copperfield* (London: Oxford University Press, 1971) を使用した。本論中、作品*David Copperfield*からの引用の直後のかっこ内の数字は章、頁をそれぞれ示す。
- 2) ジョン・セイモア『イギリスの生活誌—道具と暮らし』（原書房、1990）、p. 21.
- 3) Stefanie Meier, *Animation and Mechanization in the Novels of Charles Dickens* (Zürich: Francke Verlag Bern, 1982), p. 86.